

《講演要旨原稿の書式》

横 100 mm, 縦 150 mm に納まるように印字ください。

例えば以下のページ設定 (A4 縦) のもとで、印字する全体を 29 行とすると、所定のサイズになります。

余白：上 46 mm, 下 25 mm, 左右各 55 mm

一行字数：26 文字, 行数：44 行

フォント (和)：MS 明朝 11 pt, (英)：Century 11 pt

- 1) 著者名とタイトルの間はコロン “:” とする。
- 2) 共同研究の場合は、演者の左肩に “○” をつける。
- 3) 著者名：タイトルと本文の間は 1 行空ける。
- 4) 共同研究で研究者の所属が異なる場合は、“*” 記号で区別する。
- 5) 所属名は公式な略記を使用する。

《講演要旨原稿の書式見本》

○石川友美*・納谷友規**・真山茂樹***・天野一男*：北浦に流入する河川起源付着性珪藻殻の運搬・堆積過程

茨城県北浦に流入する河川の付着性珪藻 (生体) と湖底堆積物中の付着性珪藻 (遺骸) の分布を明らかにし、その運搬・堆積過程を明らかにした。

河川に出現した付着性珪藻の一部の種においては、水質を反映していることがわかった。これらの種の出現変化を見ていけば、湖沼堆積物中の河川起源の付着性珪藻殻は過去の水質指標となりうる。

湖底堆積物中の付着性珪藻の種組成は、地点によって大きく異なる。これは河川起源の珪藻殻が湖に流入した後の沖合への運搬の影響と考えられる。そこで、河川全地点の各付着性珪藻の平均出現頻度と、湖底堆積物中の付着性珪藻の出現頻度の比較を行い、種による運搬・堆積過程の違いを検討した。

Type I：河口付近での出現頻度が河川の平均より高く、沖合で減少することから、河口付近に堆積しやすく、沖合へは流されにくいと考えられる種 (*Melosira varians* など)。

[略]

・・・の可能性も考えられる (*Nitzschia paleacea* など)。

(*茨城大・理, **産総研, ***東京学芸大・教育)